

令和元年度 第1回インクルーシブ教育（支援児包括教育）推進委員会 議事録

□開催日時：令和元年7月16日（火）14時30分～16時40分

□開催場所：駅北庁舎4階 災害対策本部

□出席者（敬称略）

・委員：宇野宏幸 柴田勇夫 廣瀬和信 山田健司 高尾和督 保母朋子
渡邊早百合 則武里香 可知徳仁 長谷川邦代 川西有潔
瀬瀬育恵 天野智恵子

・事務局：渡辺教育長 鈴木副教育長 田中次長 後藤正樹 井口裕子 長谷川京子
大山克則

1 あいさつ

教育長あいさつ

2 自己紹介

3 委員長、副委員長選出

4 報告・検討内容

（1）基本施策の進捗状況について

委員

（就学先決定の仕組み等が記載された）リーフレットがよく考えられていて、とても分かりやすいものができたと思っています。また、教職員の立場から、こういったリーフレットを参考にして、就学先を決めていったんだな、ということが分かります。教職員に配布をする予定はありますか。

事務局

各小中学校には、メール配信をしました。教職員全員に配布するかは、検討したいと思います。

委員

別室登校児童学習サポート事業は、教員をやってみえた方と一緒に学習を進めるということで効果があると思います。学校から足が遠のいていた児童が、学校に来るようになって、先生と一緒に勉強できるということは、よいことだと思います。

委員

リーフレットの裏面の相談場所の一覧は、相談をしたい保護者だけでなく、教職員にとっても役に立つと思います。教職員だけでなく、保護者にも、「こういった相談窓口がありますよ」と勧めることができます。

委員

園と学校との連携に関わって、今年度意識していることは、早い段階で個別の教育支援計画に目を通すようにしていることです。困ったときに支援計画を見るのではなく、児童が困る前に支援ができるように準備をしたり、保護者の思いを知ったりするようにしています。必要に応じて、幼稚園や保育園に電話をして、入学前の様子を知るようにしました。また、忙しい時期ですが、4月の早い時期に、スマイルブックを持っている子の保護者と懇談をすることが大切だと思いました。

委員

卒業した子たちが、どのような生活を送っているかが分からないので、知ることができるような機会があるとよいと思います。

委員

巡回相談を通じて、小学校につなげていく際に、どのような学びの場が望ましいのか、また子どもの情報を共有していくことの必要性を感じました。

委員

学校在学までは、見通すことができるが、学校卒業後のことを見通すことは、保護者にとっては難しいです。目先のことでなく、将来のことまで話題にできるとよいと思います。

委員

中高連携会議では、市立、県立、私立等の種別を超えた情報交流ができた。中学校を卒業した生徒が、高校でこんなに頑張っているという情報の交流もできたことは、よいことだと思います。また、個別の教育支援計画を作成している生徒だけでなく、作成していない生徒も話題になりました。中学校から高校に送った支援計画が高校で活用しやすい内容になると連携がうまくいくと思います。

委員

昨年は小学校から中学校に進学し、先生も替わって、本人にとっては大変な一年でしたが、今年は、一年経ったこともあり、順調に学校生活を送ることができています。スマイルブックの具体的な活用については、困ったこと等を記録に残しておく、以後活用ができると思います。個別の教育支援計画については、（中学校から）本人の同意の署名をするようになり、最初は理解できるか心配だったが、本人に話をすると、自分の困り感や今後の希望を理解していることが分かりました。

委員

スマイルブックについては、母子手帳のように活用できるとよいと思います。高校に入学するにあたって、配慮が必要な場合に、活用できるとよいと思います。

委員

支援計画については、半年に1回モニタリングを行っており、その都度修正を行っています。児童生徒については、成長が早いため、支援計画の作成は大変だと感じます。高校を卒業した18歳から70歳まで52年あり、持続可能で将来を見据えた支援を行っていかねばいけません。学校卒業後の生活の方が長いことを考えると、学校在学中に、どれだけ将来を見据えたことを考えていくかが必要だと思います。

副委員長

多治見市ならではの取組を着実に実行に移しているように感じます。スマイルブックの活用、通常学級におけるユニバーサル授業の推進、ICTの活用等を巡回相談で各学校を訪問し、話題にしている点がよいです。特定の児童生徒だけに視点を当てるのではなく、様々な領域とどのように結びつけていくのか、また校内での連携も重要な視点になってきます。さらに、地域とのつながりも大切になってきます。子どもの将来像をとらえ、就学前から小中学校、高校、大学にどのようにつながかを考えていくとよいです。就労についても重要な話題で、地域で育つ、地域で育てる、さらには多治見市の産業等とも絡めていけるとよいと思います。学校では、柔軟に作業に取り組むことや、コミュニケーションの力を付けるなど、社会に出て活用できる力を身につけてほしいと願っています。

(2) 令和元年度の推進計画について ＜スマイルステップシートについて＞

委員

スマイルステップシートは、いつ書くのか。また、全員書くのでしょうか。

事務局

入学時とは限らず、個別の教育支援計画を作成し始めたときに書いてもらことを想定しています。その後は、保護者に負担にならないように、修正をしたり、付け加えたりいくことを考えています。全員に書いてもらうことが望ましいが、場合によっては学校の先生と懇談をしながら記入する等、負担にならずに、保護者の思いを引き出せるようにしていきたいと考えています。

委員

家族支援プログラムというものがあり、子どもの年齢と親の年齢を書くようにしています。このプログラムは、親の将来の生活と子どもの生活をリンクさせ、ライフプランの中で、自分のことと子どものことを同時に考えることができます。

委員

個別の教育支援計画の中のライフステージは、正直なところ形骸化されているように感じていました。巡回相談では、将来への見通しをもつことができず、不安を感じている保護者が多いように思います。最終的には、このシートを通じて、子どもたち自

身が自分のことを理解し、将来を前向きにとらえることができるツールとして活用できるとよいと思います。

委員

こういったシートを書くことで、「将来のことを考えるきっかけになった」と話す保護者がいました。また、「保護者が、将来に向けてこういった思いでいる」ということを、担任が知ることでもできました。書き終えた後も、修正を加えることで、その都度将来のことを考える場にもなってよいと思います。

副委員長

こういったシートが支援の充実に向けて、重要なツールになっていくと思います。このシートを「何に使うか」が大切ですが、学校現場では個別の教育支援計画を作ることが目的になってしまっています。このシートは保護者と学校で、子どもの将来像を共有することがねらいになると思います。同時に、このシートを書くことで、保護者が子どものことをどれだけ理解してるか、将来像を持っているかを把握し、この子にとっての学びの場を考えたり、保護者と意見交換ができたりするようになると思います。

文言等に関しては「身につけてほしい」という表現を、「伸ばしていく」という表現にしてもよいのではないかと考えます。個別の教育支援計画のライフステージは、もう少し幅を持たせてもよいと思われます。学ぶ場については、学ぶ時の困難さも話題にし、困難さを予想して、手立てを考えていくことができると思います。将来、どのような職業に就きたいのかを記述する欄も設けてもよいかもしれません。

<中学校における通級指導教室>

委員

中学校の先生が、中学校での通級指導教室の必要性を感じているのかを知りたいです。

委員

中学校で通級指導教室があったらよいと思っています。しかし、実施にあたっては配慮事項や環境整備が必要になってきます。児童生徒の力を伸ばすだけでなく、周囲の子ども育てていかないと、本人が通級で身につけた力を発揮することができません。通級で学んだことが、あの場面で生かすことができたという実感がないと、充実感を感じることができないと思います。インクルーシブ教育というのは、周りの子ども育てていくことが大切だと思います。

中学校で通級を設置するならば、拠点校方式でいくのか、巡回方式でいくのかも考える必要があります。拠点校方式になると、授業中に違う中学校に行かなければならず、思春期の子どもたちにとっては心の負担になることも予想されます。時間を区切って通ったり、生徒玄関を別にしたりといった配慮も必要になってくるでしょう。そう考えると巡回方式が望ましいのですが、拠点校方式であれば、生徒に他校の生徒が勉強

に来るよと教えるよいチャンスになります。

中学校になって、限られた教科の時間を抜けて、通級で学習することは、貴重な学習する時間を減らすことになります。しかし、その子にとってコミュニケーションする力やＳＯＳを出す力等を身につけたいという思いがあるならば、学力以上に得るものは大きいでしょう。中学校での言語通級について話題になりましたが、吃音は発達通級の中で支援を行ってもよいと考えます。

委員

医療との連携も考える必要があり、受診をしようと思うと、かなりの時間を要することになり、ニーズはあるものの、実際に通うためには大きなハードルがあります。そのために、通級の入級の条件を緩和することを考えたいです。また、通級の数を増やすことも検討する必要があるのではないかと考えます。中学校の通級の設置も考えたいが、小学校の通級のあり方も同時に検討した方がよいのではないのでしょうか。

委員

言語については、中学校段階では言語聴覚士による訓練を検討した方がよいと思われます。発達については、（友達の目が気になるので）通級に行きたくないという思いもあります。ＳＣに話を聞いてもらったり、週に一度ではなく、数週間に一度通ったりというように、その子に応じた柔軟な対応も考えていくとよいでしょう。「他地域にあるから」という考えではなく、小学校段階で力を付けていくといった考え方もあると思います。

委員

自校に通級指導教室があると通いやすいが、他校からだ保護者の送迎が必要となり、場合によっては入級が難しい面もあります。こういった点は改善した方がよいと思います。また、中学校の通級のニーズを把握する必要があると思います。

副委員長

中学校通級については、多様で柔軟な学びの場を整備していくことで、インクルーシブ教育の実現につながっていくという文部科学省のねらいがある。「多様で柔軟な」ということが学校で実現しているのか、これから実現できるのかが大切になり、保護者も求めてきます。そこで、子ども一人一人が学び方が違うことを前提にして、今後教育を進めていく必要があり、学び方の多様性を保証するような場や方法を充実していく必要もあります。

中学校における通級指導教室も、こういった点から検討事項になってきます。中学校における通級はあった方がよいと思います。連続性のある多様な学びの場をいかに作っていくのが、このインクルーシブ教育推進委員会と多治見市で考えていきたいことと思っています。保護者にとっては、早く設置してほしいと望む方もいるが、予算等の関係ですぐに設置できるものではありません。そこで、一斉指導だけでなく、それぞれの子どもが活躍できるような授業の仕方や場の設定を考える必要があります。

それぞれの子どもに応じた学び方を尊重し、工夫した授業作りをしていくことを願っています。

5 次回予定

12月を予定

6 あいさつ

鈴木副教育長